



No. 80

1. 理事会報告

○ 第101回理事会

2. 研究部会報告

3. 研究部会開催報告

4. 学術・文化情報

5. FIEALC(ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟)第11回大会での研究発表のお願い

6. 事務局から

1. 理事会報告

○ 第101回理事会

日 時：2003年2月15日(土) 13:30~16:30

場 所：上智大学10号館451室

出席者：今井圭子(理事長)、松下洋、山田陸男、後藤政子、三田千代子、小池洋一、二村久則、出岡直也、狐崎知己、堀坂浩太郎

欠席者：細野昭雄、大串和雄

<報告事項>

- (1) 第24回定期大会(6月7日~8日、神奈川大学)のプログラム等について大会実行委員長の後藤理事より報告があった。
- (2) 年報、会報、研究部会の活動状況について各担当理事より報告があった。
- (3) FIEALC日本大会の準備状況について山田理事(実行委員長)より報告があった。
- (4) 日本学術会議にオブザーバーとして出席した三田理事より報告があった。

<審議事項>

- (1) 細野、出岡両理事の海外長期滞在に伴い理事選出規定にもとづいて後任に小泉潤二、乗浩子両会員の理事就任を決め、理事長が両会員と連絡を取るようになった。
- (2) 日本学会事務局センターとの契約更新を了承した。
- (3) メーリングリストによる情報発信について、送付希望の有無を現在リストに登録されている会員にはメールで、さらに名簿作成時には全会員に確認することとした。
- (4) 会員名簿作成の方針を再確認し、調査項

目等を審議したうえで松下理事に日本学会センターへの作業発注を一任した。

- (5) 会員より学会に寄贈される新着図書について、従来どおり会報に記事として載せた上で国立民族学博物館地域研究企画交流センターに寄贈することを了承した。
- (6) 本郷豊、葛城艶子、大野友実(敬称略 以下同様)の3名の入会を承認した。

理事会終了後、小泉潤二、乗浩子両会員に連絡をとり、理事就任の承諾を得た。

新理事の役割分担

小泉潤二理事 国際交流担当

乗 浩子理事 会報編集、東日本部会担当

2. 研究部会報告

《東日本部会》

2002年11月16日に慶應義塾大学三田キャンパスにて開催された東日本部会では、「ミクロな事例から見たメキシコの現在」と題して、メキシコにおけるフィールドワークの成果を報告した3組の発表が行われた。

趣旨説明に続いて行われた「選挙監視員としてみた民主主義定着の現状：メキシコ・ユカタン州の事例を中心に」と題した渡辺発表では、発表者が実際に加わった選挙監視活動の体験から、メキシコの選挙監視活動が選挙不正に対抗する市民運動の一環として主に国内NGOにより行われたこと、現在でも選挙不正は根強く残っていること等を指摘した。会場からは、今後の方向性として、選挙監視NGOの運営資金や政治的立場についてより詳しく調査することが提案された。

受田発表は「メキシコ先住民の教育問題」と題して、ケレタロ州のオトミの例を中心に先住民に対する教育の問題を扱った。従来教育水準が非常に低かった農村地域でも、インフラを含めた教育制度の整備や親の関心の高まりから、近年その大幅な改善が見られる。その一方で、二言語教育などの先住民文化保護のための教育は行われておらず、むしろ教育によって、先住民の多くがオトミ語を放棄する事態が生じるなどの社会的な変化をももたらしていることが指摘された。

禅野・井上発表は「都市にのみ込まれた旧村落の文化—メキシコ市南西部を中心に—」

と題して、メキシコ市の拡大によって都市圏に取り込まれた旧先住民村落の現状を、元々の村人と外来の移住者との関係に注目しつつ、歴史的経緯も交えながら紹介した。具体的には祭礼および埋葬の形態や、土地や水利権をめぐる問題の中で、村人と移住者の間にどのような線引きが行われているかに焦点を当てた。人類学者の禅野と歴史を専門とする井上だが、それぞれの立場から共通の問題にアプローチしているという意味でも興味深い発表であった。

《中部日本部会》

11月30日(土)14時から15時30分にかけて愛知県立大学外国語学部スペイン語学科研究室にて開催された。出席者は18名。今回の2報告は、言語と美術に関するものであった。

堀報告は、従来、近親関係の言語ゆえに比較対照が経験則を超えるものでなかったポルトガル語とスペイン語を、語源あるいは語形的要素が共通であるいくつかの副詞の用法に焦点をあて、両者の同一性と差違を体系的に解明しようとするものである。質疑応答では、文法論の問題のみならず、東海圏の2言語の状況を反映した、スペイン語とポルトガル語間相互の移行あるいは学習上の問題点からの指摘もあった。

大橋報告は、壁画運動という美術史の視野から論じられて来たオロスコの作品を、ジェンダー論の視点から再評価しようという意欲的な試みである。スライドを使用した発表は、非常に説得力のあるものであった。フロアからは、メキシコ留学経験者から作品の所在や公開の状況といった情報提供のほか、実証主義や優生思想との関係など、狭義の美術史に留まらない、幅広い分野からの質問がなされた。

今回は、いずれも発表当初の対象は、言語と美術という文化系分野の報告であったが、活発な質疑応答のなかで、内容は社会学、政治史、思想史と広がっていった。学際的研究会の良いところである。特に今回、司会者をつとめた筆者が痛感したことは、研究が進展していると思われる既知の分野であっても、異なった視点からの理解のさらなる深化が必要であるということである。

水戸博之(名古屋大学)

ポルトガル語とスペイン語の対照研究—副詞の強調用法について—

堀 由美(名古屋大学大学院)

ポルトガル語とスペイン語の副詞の強意的表現を比較検証した。具体的には、「とても」と「まさに」を意味するbem(ポ)とbien(ス)、mesmo(ポ)とmismo(ス)を、intensificação「強化」機能とfocalização「焦点化」機能を

用いて分析した。類義語muito(ポ)とmucho(ス)、muy(ス)やjusto(ポ)とjusto(ス)との競合関係を明らかにすることにより、上記の強意語が意味する「とても」と「まさに」の違いを実証した。

ナショナリズムとジェンダー：メキシコ壁画運動第一号プロジェクトにおけるホセ・クレメンテ・オロスコの女性像に関する一考察

大橋敏江(名古屋造形芸術大学)

1922年、メキシコ壁画運動第一号プロジェクトで、ホセ・クレメンテ・オロスコによって描かれた女性像がジェンダー視点から分析され、それらが自己犠牲、母性、良妻賢母、家族への献身の表象であったことが議論された。女性や家族という自然化された対象を表象することによって、母への愛と祖国への愛を同一化させたこれらの作品は、国家が国民のナショナリズム高揚のために制作したきわめて巧妙な政治的装置であったことが明らかにされた。

《西日本部会》

西日本部会研究会は、12月14日(土)1時半から5時半近くまで、神戸大学国際文化学部会議室で開催された。出席者は30名で、久々に多数の参加者を得て、活気があった。はじめに松下洋理事より、挨拶と特別ゲストを紹介いただき、なごやかに会は始まった。ゲストのアルゼンチンの政治学者、サンマルティン大学政治学部長のマルセロ・カバロッシ(Marcelo Cavarozzi)教授は、神戸大学国際協力研究科で開催された国際シンポジウム「途上国の政治—ラテンアメリカにおけるポピュリズムを事例として」の発表者の1人で、氏も挨拶の言葉を述べられた。

今回は両者ともフィールドワークに基づいた人類学的研究報告で、しかも重なり合うテーマ、民衆音楽、言語実践、アイデンティティなどを主題としたものである。同種あるいは近似するテーマ、専攻で研究会を開催する是非を勘案しながら計画された。2報告とも音響資料なども併用しつつ、特に興味深い使用言語と実践のあり方についての特徴を具体例をもって浮き彫りにしながら、そこに含まれる様々なレベルの意味や問題点を指摘するものであった。欲を言えば、両者を合わせた発展的議論への盛り上がりももう少し欲しかった、などという反省点もあるものの、鋭い質問や建設的なコメントも多く出て、報告者、出席者双方に有意義な時がもてた。有効な資料の提示と結論部分への道筋、また解釈において、さらに発展させられる課題をいくつか含むものであり、今後これらをもとにした論文などへの結実が大いに期待される。報告者による要旨は以下のとおりである。

報告要旨

ブラジルの都市サンパウロのヒッピーホッピ (hip hop)：貧しい若者の言説的实践

北森絵里（天理大学国際文化学部）

本発表では、サンパウロのヒッピーホッピにみられる言説を対象とし、そこに表現・表象される貧しい若者の生活や感情をみることで、彼らは自分たちを取りまく社会と他の社会集団をどのように捉えているのか、また、貧しく過酷で暴力的な現実と折り合いをつけながら生き抜いていくための実践はいかなるものかを考察した。

言説の特徴を検討すると、そこには貧しい若者による他の社会集団との差異化が見取れる。彼らは、都市化が排除してきた「汚点」としての他者であることを誇示し、自ら都市社会の中の「内なる他者」であろうとする。同時に、彼らは、弱者としての、また、善良な低賃金労働者としての貧困者であることを拒否することで「さらなる他者」であろうとする。このようなヒッピーホッピの言説的实践は、単純な「反権力」や「対抗」ではなく、日常を支配する権力の場から出ることなく、様々なレベルで自己と他者を差異化し、排除を通じた主体の形成であると考えられる。

メキシコ・ブレベチャ音楽「ピレクア」とエスニック運動の展開—くブレベチャ語でピレクアは歌えるのか—

田中雅彦（日本学術振興会特別研究員）

ピレクアとは、ミチョアカン州に居住する先住民ブレベチャの音楽である。ピレクアを歌う人々は、1980年代以降のエスニック運動の興隆によって、先住民文化の担い手・表現者としての地位を得ていく。こうした状況のなか、1999年にメスティソとブレベチャとで構成されるピレクア・グループが登場し、多くのコンクールで好成績をおさめる。しかし、このメスティソ歌手を排除しようとする動きが他のブレベチャ歌手たちのあいだから生じた。これをきっかけとして、ピレクアは「純粋で正しいくブレベチャ語で歌うべき」であること、「スペイン語の影響をうけた言葉や表現を歌詞に用いるべきではない」ことがコンクールで明言されるようになる。メスティソとともに活動するブレベチャ歌手は、この条件を満たそうとして、歌詞の見直しを図る。しかし、現在日常的に使われている「ブレベチャ語」はスペイン語の影響を抜きにしては成立しえない言語である。そのために、ピレクアをくブレベチャ語で歌うことができないという事実がブレベチャ歌手自身が直面している。

3. 研究部会開催案内

○東日本部会

日時：3月29日（土）午後2時から

場所：上智大学10号館3階322室

報告者・報告課題

1. 網野航介（上智大学大学院）『『モダン・アート』/『ポピュラー・アート』の恣意的区分を越えた相互交通の可能性に向けて』
2. 村瀬幸代（上智大学大学院）「チリ生鮮果物輸出産業の発展過程における中小農の位置づけ」

*なお、発表者の募集のお知らせが会員の皆さんに十分に届いていないこともあるかと思えます。応募の期限が過ぎましたが、発表(40分予定)を希望される方は、当日の発表の時間がまだ充分ありますので、研究部会運営委員田村(rika-t@sophia.ac.jp)までお知らせ下さい。

問合せ先：田村梨花 (rika-t@sophia.ac.jp)

○中部日本部会

日時：3月29日（土）午後2時—5時

場所：名古屋大学言語文化棟1階A会議室

報告者・報告課題

1. 大野友実（愛知県立大学）「Diego Riveraのヨーロッパ留学時代」
2. 瀧藤千恵美（名古屋大学大学院）「ボイブンの歌詞に見る環境思想」
3. 佐原みどり（名古屋大学大学院）「ジェンダーと信仰—メキシコのEXTOVOからみる女性のグリーン・ワーク」

問合せ先：

田村敬一

Tel：0561-64-1111(ext.2604)

Fax：0561-64-1107

E-mail：keiichi@for.aichi-pu.ac.jp

水戸博之

Tel/Fax：052-789-4826

E-mail：k46240a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

○西日本部会

日時：4月5日（土）午後2時—5時

場所：神戸大学国際協力研究科棟2階206号室

報告者・報告課題

1. 葛城艶子（神戸大学国際協力研究科博士後期課程）「チリにおける社会政策と貧困」
2. 高橋直志（同志社大学経済学研究科博士後期課程）「中進国における経済自由化の進め方をめぐって—19世紀末のチリの事例—」

問合せ先：松下洋 (tel&fax 078-803-7119、もしくは、mahiroma@aol.com)

4. 学術・文化情報

第12回ワステカ研究者会議

小林致広（神戸市外国語大学）

2002年10月末、イダルゴ州ウエフトラのワステカ師範学校で、「ワステカの人類学と歴

史学』と題する第12回ワステカ研究者会議が開催された。ワステカは、ベラクルス、プエブラ、イダルゴ、サンルイスポトシ、ケレタロ、タマウリパス州にまたがる地域で、本来はマヤ系言語のワステカ語を話す民族集団の居住地域という意味だが、実際には、ワステカ（自称テネック）、ナウア、オトミ（自称ニャニユ）、トトナカ、テベウァ、パメ（自称シオイ）の先住民族とメスティンが居住する多民族地域である。会議の主催者である社会人類学高等調査研究センター（CIESAS）で在外研究中の報告者は、関係者の好意で日墨交流計画で滞在中の大学院生2名とともに会議に参加できた。

1981年以来、隔年で開催された会議では、ワステカに関する多様なテーマが議論されてきた。今回は、ワステカの歴史学（8報告、以下同じ）、教育と共同体（4）、宗教・医療・社会（9）、ワステカと諸制度（7）、ワステカの政治と社会（7）、経済と社会（5）、文化と社会（6）の7つの部会が組織された。大学や研究機関の研究者だけでなく、人権運動や二言語教育に携わってきた先住民やウワパンゴの演奏家による研究発表も行なわれた。

発表者には、*Corn is our Blood*の著者 Alan Sandstromのような著名な研究者もいたが、大半が若手の女性研究者であったことが最大の特徴である。また、発表者の2割が外国籍研究者（米国2名、ポーランド2名、イタリア・オランダ・ドイツ・ハンガリー各1名）となっていた。東欧の研究者はCIESASが1990年代後半から推進してきたワステカ研究計画によって受け入れられた人たちである。また、メキシコの若手発表者のうち10名は、ワステカ研究計画に基づいてCIESASが受けた歴史学人類学大学(ENAH)の大学院生だった。CIESASの敷地内にあるワステカ文書センターでデータ入力作業をしているのを見かけた大学院生はほぼ全員会議に参加していた。27日夕方の開会式では、彼らの作業の成果であるCD-ROM『ワステカ—過去と現在』の紹介が行なわれた。

1時間半の昼食休憩を挟み、朝9時から夜7時過ぎまで、30分単位で発表が続くという過密日程、梅雨を思わせる高温多湿のために稼動するエアコンの騒音で発表者の声が聞き取りにくいという劣悪な環境にもかかわらず、常時30~50名の参加者による活気にみちた議論が行なわれた。夕食後もホテルで穀種予祝のためのチコメシヨシトル儀式、カーニバルやシャントロ（死者の日）に演じられる仮面踊りのビデオなどが上映された。また、市の中心広場では、死者の日の祭壇や仮装ダンスのコンクールが行なわれるなど、11月のシャントロに先立つ5日間、心身ともワステカ漬

けという状態だった。

28日は歴史分野の発表が行なわれた。報告者の専攻分野である16世紀のエスノヒストリーに関する発表は、メスティン領主国のエンコミエンダ制による解体過程を論じた1点だけだった。しかし、17世紀に形成された地域最大のサトウキビ農園における人的編成、18世紀末の商品割当てを強行したアルカルデ・マヨールに抵抗したパパントラの先住民反乱、ムラート女性に対する異端審問記録から女性に対する認識を分析した植民地期の研究は、いずれも地域文書を綿密に分析した興味深いものだった。

29日には、長期間の現地住込み調査をもとにした人類学関連の発表が行なわれた。農耕サイクルと死者に対する儀礼、聖地である山での雨乞い儀礼、有能者であり欠格者でもある女性呪医になる過程、紙型を使った治療儀礼、遠隔地共同体における伝統医療と近代医療システムの対立などを論じた発表があった。報告者の関心をひいたのは、薬用植物に関する先住民の知識体系の実用化を強調した地元先住民研究者の発表と、1990年代に周縁女性（配偶者不在や出稼ぎ）に支持され独自の礼拝堂を建設し、地域政治にも大きな影響を及ぼすようになった先住民女性 Amalia Bautista による宗教運動に関する発表である。また、先住民の沈黙の背後にあるものを記録する可能性と問題性を指摘した発表、先住民の白人やメスティンに対する言説（白人は牛乳を多く飲むから肌が白いなど）が意味する社会経済関係を分析した刺激的な発表があった。

30日には、1990年代のメキシコの農村地域が体験した変動（一党支配体制の崩壊、農業部門の切捨てによる出稼ぎの大量発生）が先住民共同体レベルでどのように現象しているかを考察した発表が行なわれた。特に、共同体における援助金などの権益をめぐる対立が選挙における政党の選択とどのように連動しているかを論じた発表が興味を引いた。数的に多数派の農民など貧困層がPRIから自派の首長候補を立候補させるのに対して、教師や牧場主など富裕層はPANやPTといった反対政党から候補を立候補させる傾向があるが、国政レベルの選挙では両派ともがPRIの候補を支持してきたという。

31日には、音楽や踊りなどワステカの固有文化に関する報告が行なわれた。特に、グルーポ・アグアセロのバイオリン奏者 Eduardo Bustos の「ワステカ音楽における動物学」は、ウワパンゴに登場する動物をめぐる歌詞が日常生活における人と動物との関係を如実に反映しており、そうした知識が歌を通じて子供たちに伝承されることを指摘した力感の

あふれる発表だった。

会議では、ワステカにおける黒人的要素の有無（音楽や踊りにおけるカリブの要素）、農民集団の土地獲得闘争の有効性、新自由主義による国際化と搾取の関係性などをめぐって、相対立する見解が提出され、議論が白熱化する場面もあった。顔なじみの研究者同士であるだけに、遠慮のない批判が次々と繰り上げられた。また、Luis Reyes Garcíaが、先住民研究者としての立場を鮮明にしたコメントを積極的に行ったことも印象に残った。具体的には、独立という用語を使った米国の研究者に対して、現在も植民地主義支配が継続していることを力説したり、先住民は頭（＝知性）が足りないという西欧的概念に対して、知性は肝、あるいは心にあるという先住民の概念を紹介したことなどがある。

31日昼過ぎ、会議は終了し、発表者3名がウパバングを演奏するなか、出来立てのサカウィル(半日かけて蒸すワステカ特有の巨大なタマール)を賞味しながら、会議参加者は三々五々それぞれの目的地に向かっていった。2名の大学院生は、メキシコ市に向かう報告者と別れ、二言語教師の第1世代に属する先住民教師の共同体に滞在し、シャントロを観察することになった。

5. FIEALC（ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟）第11回大会での研究発表のお願い

本年9月24日から27日まで国立民族学博物館と大阪大学を会場として、ラテンアメリカおよびカリブ海地域研究分野では、日本で初めての国際大会が開かれます。

国内でいながらにして多くの国々の研究者と研究交流をする貴重な機会になるでしょう。総合テーマは、「ラテンアメリカ、カリブ海、アジア、オセアニアにおけるグローバリゼーションの経験と展望」で、関連した中心シンポジウムも海外の著名な研究者を10名以上招き、連続基調講演をお願いします。他に主なトピックや分野別に50以上の分科会(simposio, panel)が編成され、ほとんどの参加者の研究課題が網羅されることとなります。

分科会企画に至らない個別研究の発表申込は、本年3月末日を締切り期限として現在受け付けております。分科会企画は、2月中旬で一応締め切りましたが、すでに提出済みの企画に関連した全体および個別発表の要旨(15行以内)は引き続き受け付けています。また、企画内容と構成によっては、特例としてなお分科会企画を受付けることもあるので、ご相談ください。

個別研究の内容に関しては、総合テーマおよびホームページなどで例示されている10本の柱のほか、それらに収まらない分野やトピック別の発表も歓迎です。ただし、個別研究は、実行委員会により、すでに提案されている何らかの分科会に編入されるか、他の関連発表とともに新たな分科会企画とまとめられることとなりますので、ご了承ください。

皆様が積極的に参加することによって、海外から来日する同僚研究者にも評価され、国境をこえて新たな交流と協力の環ができる可能性があります。また、大会開催国のラテンアメリカ研究者がほぼ勢ぞろいすることは、海外の参加者の期待に応えることとなります。この大会のあとの日本のラテンアメリカ研究が一層発展すること望み、皆様の積極的なご参加を心からお待ちしております。

なお、学部学生、大学院生の参加に関しては、普通の登録料とは別に割引料金を設けたく検討中です。大会に関する情報と申込などの主要媒体として、ホームページを開いておりますので、ぜひご覧下さい。

www.pac.ne.jp/fiealc2003/

大会事務局のメールアドレスは、

fiealc03@idc.minpaku.ac.jp です。

大会実行委員長

山田 睦男 (地域研究企画交流センター)

yamadajc@idc.minpaku.ac.jp

事務局FAX: 06-6878-8360

6. 事務局から

I. 会員関係 (abc順)

訃報 当学会のために一方ならぬ御尽力を賜ったお二人の会員が逝去なさいました。

牛島信明会員 2002年12月13日

Rueda de León Héctor

2002年12月25日

ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り致します。

II. 寄贈図書

- 牛島 万「覚書『米墨戦争小史』』『国際文化研究所紀要』（城西大学）第8号（2002年10月）

編集後記

日本におけるラテンアメリカについてのステレオタイプのイメージの破壊に努めてきたつもりでしたが、本会報編集過程で、自分がそれに基づいた「ラテン系ですから」という弁解を常に用いてきたことを再発見してしまいました。ご迷惑をおかけした方々にお詫び申し上げます。（出岡直也）

No.80

2003年3月1日発行

学会事務局

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学イベロアメリカ研究所

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 03-3238-3530・3535

FAX 03-3238-3229

E-mail: m-matsu@sophia.ac.jp

事務担当理事：堀坂浩太郎

秘 書：松丸美佐子

学会センターへの問い合わせ

住所変更・異動の御連絡および会費納入に関するお問い合わせは直接、日本学会事務センターまでお願いします。

(株)日本学会事務センター大阪事務所気付

日本ラテンアメリカ学会担当 中倉佳奈子

〒560-0082 豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル14階

Tel. 06-6873-2301 Fax. 06-6873-2300

受付時間 9:30-5:30 (土日休み)